

私の中の、偽善者という人物

1 C 0 6 0 1 1 4 - 3 第一文学部一年

伊藤 充則

・導入、動機文、或いは自白

まず断っておきたいのは、文中に出てくる「偽善者」とは、周りからの評価を得ようとか、そのような利益追求のために偽る者という意味ではなく、自身で自分の行動に納得できるように善を繕う者のことである。

私は自分のことを善人であるとは思っていない。例えば、小学校2年生の頃、クラスメイトが給食中に食べたものを戻してしまった時に、思わず私は「オエッ」とリアクションをとってしまったことがあった。これは体調が悪くてどうしようもなく嘔吐したクラスメイトを傷つける軽薄な行為だったと思う。たかが小学生の頃の話じゃないか、と思うかもしれないが、このような行動を咄嗟にとってしまう性質が自分の根本にあると考えると、たとえ小学生の頃の話であろうと、「やはり自分は善人ではない」という答えを導いてしまうのである。

私が自分を善人でないと強く認識するのには他にも理由がある。私は昔から「いい人」だという評価を受けてきた。文集のランキングコーナーではいつも「優しい人ランキング」の1位の欄に名前があったし、一部の女の子たちに、「神様」と自分の知らないところで呼ばれていたりした（これは素直に喜べない、「神様」って・・・）。自分は上に挙げたエピソードなどから自分は善人ではないと思っているのに、周りの評価はそれに反して私のことを「いい人」と言う。そのギャップが逆に「僕はこんなに悪い人間なのに！」という反発を生み、余計に善人でないことを意識させられるのだ。

しかしこのままではいけない、と高校入学を前にして私は一つの問いを自分に向けた。「自分が悪い人間だとして、それでは自分はどうするのか。悪いなりに善を取り繕うのか、それとも、どうせ悪い人間なんだと不貞腐れて善を諦めるのか。」と。憎らしい相手を殺したくても自分の考える善のためにそれを堪えるか、あるいは、どうせ自分は悪だからとその相手を殺してしまうのか。その、極にも程があるような極論を考えたら、答えは簡単に出た。私は前者を選ぶことにした、「偽善者になろう」。

そして私は、もし高校でいじめられている人に遭遇したら、どれだけいじめる側が怖くても絶対にいじめられている人を助けよう、などと決意を立てて入学した。結局いじめなどは一切なく、私が行った「偽善活動」はせいぜい、今までは落ちていても無視していたゴミを拾う、というくらいのもに留まった。

けれど、「偽善者になろう」と決めたおかげで、以前あった周りの評価と実際のギャップに苦しむことはなくなった。誰かに「いい人だ」と言われれば、それは自分の「偽善活動」

が認められた証拠だと喜べるようになったのだった。

そして、今まで拾わなかったゴミを、偽善によって拾った時に、私は偽善者であることの素晴らしさに気づいた。確かに、私は真の善からではなく、心を偽ってゴミを拾う。けれど、それは「偽る」ということではなく、「真の善に憧れて」と解釈するとどうだろう。それは夢見るサッカー少年のドリブルの練習と同様に、実に穢れなきものなのだと考えることができる。つまるところ「偽善」とは実は、世間で使われているような下品な意味のものなどではなく、善でない自分が理想の善に向けて自己実現するという非常に前向きな行為なのだと気づいたのだった。

そして、偽善者を始めてから気づいた偽善のメリットは他にもあった。自分の心が善の精神に溢れていたにしろ、偽善精神に侵されていたにしろ、その精神から発した行動自体には全く違いはない。誰かが他人の善行為を見て「自分も動かなくちゃ」と思ってくれたらそれは素晴らしいことだが、誰かが私の偽善行為を見て同様のことを思ってくれても、それはやはり素晴らしいことなのだ。他人から見れば、善のゴミ拾いも偽善のゴミ拾いも同じなのである。すると、もし善行為に意味があるとすれば、同じく偽善行為にも大きな意味があるはずだ。

さて、ここまで私の定義した「偽善者」について、そして「偽善者の良い点」を挙げてきたのだが、こういった俄作りの定義は、他者にとってなかなか理解しづらいものであると思う。そして、何より自分がいまだその偽善者の定義に、或いは偽善者の性質について完全な理解を持つことが出来ていない。これからも偽善活動を行う身としては、そこをしっかりと理解し、自分のものにしておかななくてはならない。そこで今回、この対話レポートを、自らが作り上げた「偽善者」という人物のその性質をよりよく理解できるよう精進する場として、利用しようと思う。偽善者とは何者なのか、それを見極めてやりたいと思う。

・対話報告、或いは言い訳

今回私は、この講義で知り合った太郎（仮名）さんと対話を行った。太郎さん自身もゴミを拾う人で、それは私以上だった。そういう面で、今回の対話の相手としては理想的だったと言える。以下はその対話で飛び交った言葉たちと、それに関する私の思索の痕跡である。

(1) これって偽善？

今回の対話で一番の問題になったのは、私の定義した偽善が果たして「偽善」と呼びうるものなのか、ということである。

私「この行為を偽善と呼ぶことに対して抵抗みたいなものはありますか？『なんか偽善とは違うんじゃない？』っていう感じは・・・」

太郎「そうですね・・・。よく『偽善者』とか、『それやんの、お前、偽善だよ』とか『見

振り返って『だろ』とかいう感じで言われるイメージで偽善者を取ってるんで、それとはまたちょっと違うんじゃないかなと・・・」

私「一応これ、断り入れてはいますけど、それでもやっぱその辺が・・・」

太郎「払拭しきれない感じがしますね」

このように、やはり「偽善」という言葉に対するイメージが固まってしまっている太郎さんを始めとした読み手にとって、私が俄かに定義した新たな「偽善」はなかなかうまく飲み込めないようである。特に私の定義の中にある「周りからの評価を得ようとするのではなく」の部分を読み手の感覚に植えつけることに失敗している。

どうしたら自分の偽善の定義を相手に受け入れてもらうことができるのか。考えたところ、これはまず私の考える「善」と「悪」を読み手にわかってもらうことが必要だろうという結論に至った。先の動機文には「善」と「悪」に対する明確な私の考えが書かれていなかったもので、そこを深く掘り下げていけばおのずと「偽善」の定義も受け入れられるのでは、と考えた。それでは、ここで私の考える「善」と「悪」について簡単に述べさせていただく。

まず私の考える「善」とは「無意識から発せられるもの」である。あるいは、無頓着、と言い換えたほうがより正確かもしれない。例えば、私の考える善者は道端に唾を吐く不届き者に遭遇した際、何の考えも無しに注意をすることができる。注意したことで因縁をつけられるかもしれないし、お気に入りのシャツの襟元が伸びきってしまうくらいに首根っこを掴まれることになるかもしれない。けれどそんなリスクに対して、「唾を吐かれたこと」自体は善者に大きな害を及ぼさない。自分の服に吐かれたわけでもないから、その唾を吐いた地点を避けて歩けば彼にデメリットは生じない。ハイリスクノーリターン、それでも彼は因縁、首根っこを伴う「注意」という行為を、後先考えず行ってしまう。それは唾を道端に吐くことがいけないことであり、彼が無意識の、あるいは無頓着の善者だからである。

同様に悪も無意識から生じるものだ、と私は考える。再び例をあげる。まず泥棒は悪だ。それは大前提だ。しかしお金に困って泥棒を働いたのと、無意識に気づいたら手の中に盗品が握られていたというのでは、一体どちらがより本物の悪と言えるだろうか。そうして考えてみた時、やはり無意識からの泥棒は「不治の、その人間の本質的部分から来る」といった印象を受ける。貧困からの泥棒は、貧困という理由を取り除いてやれば自然収まるが、無意識からの泥棒は原因がない以上どうすることもできない。やはり更正の余地のない悪の方がより本物的と言える。

そしてこの無意識の、本物的な悪というのが、動機文に挙げた「オエッ」のエピソードに、悲しい哉、見事当てはまってしまうのである。無邪気だったからこそ、それが僕に「自分は悪だ」と強く認識させたのである。今回の対話でも、「オエッ」のエピソードはそんなに悪ではないんじゃないか、という意見を頂いたが、このように「無意識から出た」という点で、非常に悪だ、と私は考える。

と、以上から「善は無意識によるものである。悪もまた同様である」という結論が浮上するのだが、それを逆に考えると私の定義した偽善もわかりやすくなると思う。つまり、「無意識によるものが善」ならば、その逆、「意識的に発したもの」は「偽善」なのである。一見したところは善だけれども、その発生源は全く逆、まさにニセモノと言える。

少しは理解が進んだらどうか？とにかく私の考えでは、偽善とは「意識的に行った、善と似ているけれど明らかに質の異なる行為」のことなのである。これをうまく理解していただけたら、私の考える「偽善者」が以前よりもすんなりと喉元を通ってくれると思う。

(2) 人助けは偽善行為ではないのか

動機文でゴミ拾いのみにスポットを当ててしまったがために、このような語弊を生むこととなった。

太郎「(偽善行為は) ゴミ拾う以外に、具体的に他には何かありますか？」

私「ゴミ拾う以外にはなかなか場面が見当たらないんですけど、まあ・・・」

太郎「人助けとは違う感じがしますね」

これは盲点だった。今回、「ことばを伝えること」の難しさを痛感した大きな部分でもある。わかりやすく伝えようと使ったゴミ拾いの例示が、「人助けとは違う感じ」を読み手に与えてしまったわけである(これは、動機文の「私が行った「偽善活動」はせいぜい、今までは落ちていても無視していたゴミを拾う、というくらいのものに留まった。」の一文の影響がかなり大きいような気がする)。

この部分、対話中にも補足を加えたのだが、それはしどろもどろになってしまったので、ここで改めて補足させていただく。

ゴミ拾いは例として使いやすかったのでこの対話報告でも多用してしまったが、別これが「人助け」であってもならん問題はない。何故人助けを例に挙げなかったのかといえば、それは人助けの性質に理由がある。

ゴミ拾いはゴミを拾って、それで完結する。ゴミを拾うことはそれ自体を善とすることができる。一方、人助けはそうはいかない。人助けは行動を起こす側の「人を助ける(そのつもり)の行為」と、行動を受ける側の「助けてもらったという感覚」の二つによって成り立つものである。しかし、往々にして後者が欠けている場合がある。行動主が人を助けたつもりでいても、受け手はその行動に感謝しないどころか、迷惑に思うことすらある。その場合、いくら行動を起こす側が「人を助ける行為」をしたとしても、それは善行為にはならない。偽善にすらならないのである。

そんなわけで、人助けは今回の動機文などから外した。一応当人としては、人助けもしているつもりである。もちろん、それが受け手の迷惑になっていないとは言えないが。

(3) 意識的過ぎるのは何故か

太郎さんも実はゴミ拾いをよくするそうで、むしろ私よりもはるかにゴミを拾っているようだった。その話の中で、太郎さんは「俺の意見と伊藤さんの意見は理念が違う」とおっしゃった。それは具体的に何が違うのか、それを追求したのが以下の会話である。

太郎「早い話、そこまで俺は考えてないわけなんですよ」

私「ああ、そう。悪だから善になろうとか・・・」

太郎「っていう考えじゃないんですよ、俺。ていうか、赤ちゃんが鼻水びしょびしょに垂らしているとしますよね。身内だったら余計『ああ、鼻水垂らしちゃって』って拭くじゃないですか。その程度なんです。ゴミ箱が溢れてるから、落ちてるからゴミ拾ってポイって」

何故、私は太郎さんに比べて、こんなにも（偽）善行為に意識を向けるのか。

それはそもそも、太郎さんが善者であり、私が偽善者だから、というのが大きい。太郎さんが意識しなくても「落ちてるからポイって」できることが、偽善者の私には「落ちてるけど、手が汚くなっちゃうし・ああ無視しようかな・でも拾わなきゃ・うん・偽善行為するって決めたんだからな・よし、ポイって」くらいの紆余曲折がなくてはゴミを拾うことはできないのである。これでは、意識するに決まっている。

しかし、この太郎さんとの比較では相対的な浅い理由にしかなっていない。何故私は（偽）善行為に意識を向けるのか。ここにはもっと深い理由がなくてはならない。

おそらく、それは（1）で示した私の偽善行為の定義、「意識的に発したものが偽善である」に関わってくる。ゴミ拾いだと、その部分が若干弱いのだが、先程（2）で挙げた人助けを例にとるとわかりやすい。人助けという行為は、善の才能のない人間が無意識に行うことは非常に困難だ。ゴミ拾いは言ってしまうえば、自分の中に機械的なルールを作ればいくらでもできるのだが、一方、人助けが（偽）善行為であるためには、常に意識を尖らせ、自分の行った行為が相手にとって「助け」となったか、それを欠かさずチェックする必要がある。そのチェックを怠ってしまうと、たちまち偽善行為として行った人助けが偽善行為ですらない「ありがた迷惑」に成り下がってしまうのだ。しかもそのチェックは、実際にはほとんど実行不可能な作業である。このように、私のような偽善者は、偽善を行う際には常に意識的になっていなくてはならないのである。鼻水を垂らしている赤ちゃんの鼻を拭いてあげる前に、偽善者は、果たして鼻を拭いてあげることが本当に赤ちゃんにとって助けとなるのか、それをしっかり考えるべきなのである。

こういった考えを持っているから、私は（偽）善行為を行うことに対して過剰なまでの意識を傾けるのかもしれない。

さて、以上が私の対話の報告である。これは対話に直接関係する思索だったが、対話から得られたものは他にも多くあった。

例えば、対話していると相手から意見を引き出すだけでなく、自分自身からも新たな意見が引き出されるのに気づく。善、悪の定義はこの対話中に自分から言い出した意見だし、その際に必要になった「意識」「無意識」という言葉も、別に太郎さんが使っていたのを拝借したのではなく、動機文の作成時にはなかった、この対話を通して思いつくことができた言葉である。このように、対話とは、相手と自分の考えの違いから考察を深めるだけでなく、対話することによって自然に自分の中の考察が深まっていくことの道具にも使えるのだということを実感できた。ただ一人部屋で悶々と考えているだけでは発想できないアイデアでも、対話を通して精製することができるのだ。

さて、対話の総括も書き、後は結論だ、と言いたいところだが、まだ触れていない部分がある。BBSでの書き込みである。何人かの方が私の動機文、対話報告文に対してコメントをしてくださったが、それも大いに参考させていただいた。その中で、私が対話の時にも引用した、最も印象に残っているものが、ある方のコメントにあった「善とか言っても結局自分の精神衛生のためなんじゃないの」という言葉である。（この部分だけ抜粋する

とその方の口調が悪いように感じるが、実際は「抜粋の抜粋」みたいなもので、口調は良かったです。）

たしかに、善行為は精神衛生のためかもしれない。私の定義する善者、無意識な善者ならばなおさら言えることである。そして、一見無理をして善行為を行う、精神衛生上身体に悪そうな偽善者でさえ、精神衛生の上に成り立っているのかもしれない、と鈴木さんのコメントを読んで私は考えた。例によってゴミ拾いを用いて説明すると、偽善者は偽りの心でゴミを拾う。小さく見れば、それは精神衛生上よろしくない。しかし大きな視野で考えると、その偽善者は「嫌なゴミ拾いをする事で偽善が達成できる」と考えてゴミを拾うわけで、それは結局、精神衛生の観点から見ても利に適っているのである。偽善者は偽善を行いたいからゴミを拾う、まさに精神衛生に沿っている。そして、善が精神衛生の元行われていると思うとそれは少しショッキングだけれど、偽善の方は何ということもない。そもそも冒頭の導入で挙げたように、偽善のメリットのひとつは、その心がどうであれ行動自体は善と同じ、ということだ。たとえ精神衛生から来るものだとしても、偽善のセールスポイントの邪魔には一向ならないのである。

以上のように、偽善と精神衛生とは共存できる関係にあるらしい。これがBBSのコメントから私が出すことの出来た一番大きな発見である。

それでは、ようやく、である。今回の貴重な対話体験、BBS上のやりとりをうまく用いて、ここから結論に向かっていきたいと思う。

・ 結論、或いは不時着

以上のように対話を重ねてきたわけだが、遂に結論の章に入る。入り方が非常にぎこちないが、とにかく結論である。

私にとって偽善者とは何者なのか。

まず、最初に定義したように、私の言う偽善者は、世間一般で使われているような、周りからの評価を得ようとしてだとか、そういった外に向けてアピールするために偽善を行う人物ではない。あくまで、自己の内部に存在する悪の心を偽る、という意味での偽善である。

そして、偽善者の行う偽善行為は彼の自己実現を図るための手段である。偽善行為を重ねることで、憧れの善者を目指し、日々精進しているのである。偽善がすっかり板につき、それがいつの間にか善行為となんら変わりなく行えるようになる日を、夢見て偽善者は偽善に徹するのである。

また、偽善の良い所は、それが外から見れば善とほとんど変わらないことである。おかげで、悪人が自分の性根に不貞腐れて「どうせ自分は善人にはなれない」と悪人のままで

いなくとも、偽善によって善人のふりはできる。自動車免許に対する仮免のような、そんな良好な関係を、善者に対する偽善者の関係に当てはめてもいいかもしれない。

それから、偽善者とは意識的に善行為を行う人物のことである。悪人が偽善者でいるための必須条件が、この「意識的であること」だ。悪人は無意識になった時点で、再びただの悪人に戻ってしまう。なるべく偽善者であることを意識しているのが良い。

ここで注釈を入れたいのだが、特に人助けの偽善行為に際してはこの意識というものを忘れてはならない。人助けの場合は受け手が助かって、はじめて（偽りとはいえ）善の成立が果たされる。常に受け手が偽善に満足しているか、意識して窺わなくては立派な偽善者にはなれない。

そして最後に、偽善者とは精神衛生上偽善を行っている者である。

さて、これが私のレポートの結論、深く突き詰めた上での「私にとっての偽善者」なわけだが、よくわからないという方もいるだろう。私も頭を整理し切れているわけではないし、肝心の伝える手段である日本語もまだまだ未熟である。

しかし、もっと単純明快に、このレポートの結論を出すことが出来る。

このレポートを書き始めてから、私の偽善行為が以前よりも活発になった。それはこの文章と嫌でも付き合っているおかげで、偽善への意識が研ぎ澄まされたためである。レポートの結果、私はより偽善者に近づくことが出来た。これが結論。偽善者とは何者なのか、それは私、だったのである。

(了)

・授業の感想、或いはキレイゴト

「ネットポータルにつなぐのが億劫」。この講義を受講し始めてからそんな風に思うようになった。つないだ先に、この講義の巨大なレポートが待っていると思うと、なんだかネットポータルへのアクセスすら怖くなった。おかげで必要な情報を得られない、弊害を受けることになった。

なぜそんなにもこのレポートが怖いのか。それは単純に、これほどまで突き詰めて、レポートを仕上げたことがなかったからである。一年生という経験不足を考慮しても、この先これほど深く考察を迫られるレポートはもう卒論くらいしかないだろう、と思われる。なぜこれほどの深い考察が生まれたのか。それはひとつにはテーマの素材が自分のアイデンティティーの中核をなすものだったという理由が挙げられ、もうひとつには、「対話」という手段と生徒同士でのインターアクションがレポートを軽くさせることを拒んだからというのが大きくある。特筆すべきは後者で、これはこの講義においてとても重要なことである。他のレポートが家で一人パソコンに向かい、外界からの接触をほとんど断ち、そうして書き上げられるものであるのに対し、このレポートは他の生徒たちと一緒に書いて書

き上げられたという印象だ。こうなるともう当たり前である。一人で書いたものより、二人で書いたものの方が、当然考察も二倍の濃さになる。ブランコは二人乗りをした方がよりスピードを増して動き出す。それと一緒に。これは私の書いたレポートではない、皆で書いたレポートなのである。

皆で書いたものである以上、下手なものは提出できない。その反動で私はこのレポートを避けるようにネットポータルへのアクセスも滞りがちになってしまったのである。

しかし、そんな現実逃避もありつつも、このように完成に漕ぎつけることができた。これも先程言ったように、皆様のおかげである。こんなに逃げたくなるレポートはもう二度と書きたいとは思わないが、「皆でレポートを書く」という貴重な体験をできたことをとても嬉しく思う。

本当の主旨は「二度と書きたくない」の部分に集約されるのだが、なんとなく良い感じの終わりを迎えてしまった。まあいい、これが偽善者の性なのだから。